

二〇二四年一月五日

初日射す笹竜胆の紋幕に
肉球のしるき跡ある霜畑
懐かしき彼の筆跡初便
山茶花の白が浮き立つ夕の道
大空の碧さに気づく金鈴子
味つけは夫好みとす雑煮かな
「安寧」と祈り心に書初す

うつき
かえる
素秀
むべ
あひる
明日香
山椒

二〇二四年一月四日

軒下の薪を頼みに冬籠
る並びて揃ふ柏手初詣
愛唱の詩篇誦しつつ読初す
日照雨して光る淑気の石畳
初稽古ごみ拾ひより始まり
寝癖髪ぺこりとさげて子の御慶

澄子
うつき
むべ
うつき
なつき
かえる

二〇二四年一月三日

木肌より剥がれるやうに冬の蝶
三日はや一抜け二抜け老二人
子ら去にて無口な夫になる三日
子等去にてこれよりは吾の女正月
コロナ禍の明けて郎党初写真
電車揺れ棚の破魔矢の鈴鳴りぬ

澄子
せいじ
なつき
ぼんこ
かかし
智恵子

二〇二四年一月二日

新暦記帳はじめは通院日
抱つこされ鈴緒に触るる初詣
二〇二四年一月一日
嫁迎へ一つ増えたる雑煮腕
吹抜けの高窓射抜く初日かな
喰積をどうぞと孫の世話上手
山城の四方に展けし初御空

満天
かえる
康子
素秀
こすもす
むべ

二〇二三年十二月三十一日

去年今年句帳とペンを手放さず
感謝また感謝の年や日記果つ
亡き夫の字のメモ残る古暦
晦日蕎麦友の手打ちのお裾分け
不調なる日はみな白紙日記果つ
除夜祈祷終へて寛ぐ老牧師

康子
千鶴
たか子
やよい
愛正
むべ

二〇二三年十二月三〇日

野仏の前掛ま更年の暮
数え日の漁港賑はふ競りの声
店仕舞ふ主へ感謝の薔薇贈る

かえる
智恵子
澄子

毎日句会みゆる選・二〇二四年一月七日